

『川のことば川に聞け!』-北川の“近自然河川工法”-津野町

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は、四万十川支流北川の近自然河川工法と熊田光男さんについてお伝えします。

この春、津野町役場（社会福祉協議会西支所長）を定年退職した熊田光男さんが、生まれ育ったこの地を離れたのはたった一度、22歳の時農業実習生としてアメリカで過ごした1年間だけだ。「田舎者がいきなり外国に行きましてね、見るもの聞くもの本当に衝撃でした。」しかしこの体験が、後の熊田さんの活躍の源となる。帰国して、行政職員となった配属先は社会教育分野。『未来を担うのは若者』『地域の青年にこんな田舎にいても夢や希望が持てる環境づくりを』という基本姿勢のもと、“人づくり”をしていくことを考えるようになったのは、異国での自身のカルチャーショックが原動力になっているという。

また、その頃から全国的に有名になってきた四万十川を、その源流点があるここ津野町ではどう活用していくのか、若い熊田さんの模索は、こうして始まったのだ。

近自然河川工法 と スイス視察研修

1990年、(株)西日本科学技術研究所の福留脩文所長を講師に、この地で生涯学習大会が開催された。そこで語られたのは、四万十川の自然を守るために提案されたスイスの“近自然工法”だ。これは、地球規模の環境問題が国際的に問われ始めた1970年代、破壊された自然生態系の復元工法としてスイスやドイツで生まれたもので、必要以上にコンクリートを使わず、生態系に配慮し、出来るだけ自然に近づけるようする“工法”だ。その言葉を聞いたとき、熊田さんは「求めていたものは、これだっ!」と感じたという。

時を同じくしてその頃、“ふるさと創生資金”の1億円が東津野村（当時）に入ってきた。熊田さんは、「そのうちの一部を、これから村を背負う若者の教育に活用したい」と提案し、それが受け入れられた。その内容は、福留先生から聞いたスイスの近自然工法の視察研修の企画であった。こうして、5年間で延べ48名の村民がスイス視察研修に参加し、その参加メンバーが中心となって『カウベル会』（近自然工法を学び自然を活かした村づくりを考える住民グループ）を立ち上げ、その後の活動が展開していったのだ。

近自然河川工法 = 多自然型川づくり工法

その頃、国道439号線沿い北川の芳生野地区で、コンクリートで固められた人間の利便性だけ追求したような護岸工事が行われていた。治水のためにはやむを得ないが、それにしても、今まであった美しい景観は損なわれ、自然を必要とする生きものもそこから姿を消しつつあった。その状況を見ていたカウベル会メンバー達は、これではいけないと土木事務所に働きかけ、そして土木事務所も理解を示した結果、数カ所を“自然に戻す”工事が行われた。また別の場所では、カウベル会の行政への働きかけにより、幅30m・高さ6mもの大規模な落差工を改修し、魚が遡上できるような元の河川に戻した事例もある。

今でこそ河川法も改正され、治水・利水だけでなく環境に配慮した河川工事が行われるようになったのは、陰にこうした人々の努力があったからこそだと思う。

人間が生きていく上で、たとえば治水であるとか、自然環境にどうしても人間の手を加えざるを得ないことも多々あるのは事実だ。しかし、人間の利便性のみ追求するならば、それが生態系に大きな負担を強いることも事実だ。「近自然工法というのは、“人工物全てを破壊する”かのように誤解されている部分もあるようです。しかし、そういうことではない。治水上の安全性を十分確保しつつ、生態に配慮して改修を行うものなのです。」近自然工法であっても、近自然工法であるからこそ、人間の勝手な思いこみでやってはならないだろう。

“川のことば 川に聞け!”

今は岸辺の木々も生長し、もとあった自然に近づいた北川の流れに、一見無造作に置かれた岩。 それを取り囲むように川が流れていく。その緩急ある流れの中に、よく見ると無数の黒い点が観察できる。

「見えますか? あの岩の周りを取り囲むように泳ぐウグイの群れが。改修工事で置いたあの岩のおかげで、彼らは穏やかな流れに身を任せられる。」 「四万十川の状況は、昔と比べたら年々悪くなっていると言われますが、“川のことば川に聞け”という想いが、常に自分にはあります。川の状況を観察し続けると、そこから解決策が浮かんでくるように思うのです。」

自然と対話するように自然に寄り添って、初めてわかるものがある。おそらくそれは、熊田さんのように、自然と共に生きてきた故に出来る術なのだろう。

「小さい頃から、ここは自分のフィールドだった。自然の中で暮らす事がとても好きで、様々な事に感動を見いだせた。」そんな豊かな子ども時代を送ることができた、北川が流れるこの地を、後世の人々に引き継ぐことが“自らのミッション”である、北川を見つめる優しい表情の熊田さんの横顔からは、そういう想いが伝わってくるようだった。



熊田さんの後:幅30mの落差工の改修あと



小動物が移動できるように、石が敷かれたボックスカルバート（人工のけもの道）